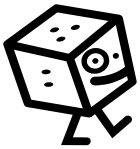
発行日：
2021年3月18日

明治学院大学心理学部　白金心理学会報

さいころ



第13号

2020-2021白金心理学会イベント

- 2020年5月
  学生部会心理学科SC
  メール相談会
- 2020年5月25日～27日
  学生部会心理学科SC
  新入生オンライン交流会
- 2020年7月5日
  学生部会教育発達学科SC
  新入生オンライン交流会
- 2020年11月8日
  白金心理学会第13回大会：
  総会、2019年度奨励費獲得者研究成果報告、博士学位取得者講演、学科別講演会開催
- 2020年11月14日
  学生部会教育発達学科SC
  第2回オンライン交流会
- 2020年12月12日
  学生部会心理学科SC
  オンライン交流会
- 2021年1月20日
  学生部会大学院SC
  「院生とZoom」オンライン交流会

目次：

会報第13号発行に寄せて	1
白金心理学会第14回大会のお知らせ	1
第13回大会報告	1
研究奨励事業報告	2
博士学位取得者講演	2
博士学位取得者講演	3
学科別講演会	4
退任教員からのお言葉	5
学生部会SC活動報告	6
事務局よりお知らせ	6

会報第13号発行に寄せて

緒方　明子学会長（心理学部長）

本当に大変な1年でしたが、白金心理学会は健在です。2020年度の大会は開催時期を遅らせたものの、Zoomで開催することができました。例年以上に遠方からの参加者があり、懐かしい再会もありました。必要に迫られた新しい試みであり、例年とは異なる準備をしなくてはならなかったため、運営に携わったメンバーは大変な思いもされたことと思います。しかし、新たな一歩を踏み出すきっかけにもなったように思います。

この数年、規約を見直したり、パンフレットを新しくしたり、SC企画の行事も新しいものが生まれています。同窓生が毎年増えていくことと合わせて、同窓会でもある白金心理学会は益々発展していかなくてはなりません。

緒方　明子先生

この3月でご退職される先生方には、ぜひこれからもOB/OGとしてサポートをお願いいたします。大会でお会いできることを楽しみにしています。

2021年4月から、白金心理学会会長は野末武義心理学科教授に変わります。3年間ご協力をいただいた事務局長の野村先生、運営委員会の先生方、事務局の吉川さん・稲嶺さん、そしてSCの皆さんに心より感謝申し上げます。

白金心理学会第14回大会のお知らせ

野村　信威先生（心理学科准教授）

新型コロナウイルスの感染者数の増加や収束の見通しが未だに立たないことを受け、 来年度に開催を予定している白金心理学会第14回大会は秋学期に開催することとします。具体的な大会の日程や通常の対面形式とオンライン形式のいずれで開催するのかも未定です。大会の詳細は今後の感染状況を見きわめて4月以降に決定いたします。今後のお知らせは、白金心理学会ホームページ（https://psy.meijigakuin.ac.jp/hiropsy/）などで随時お知らせします。

白金心理学会は卒業生の皆さんが教員や後輩と再会する貴重な機会となります。次回の大会がどのような形で行われるかは分かりませんが、ふたたび皆さんとお会い出来ることを楽しみにしています。

白金心理学会第13回大会報告

2020年11月8日（日）に開催された白金心理学会第13回大会は、新型コロナウィルスの感染対策のため、当初予定していた6月開催を11月に延期するとともにはじめてのオンライン形式による開催となりました。

当日はおよそ40名の教員、卒業生、大学院生を含む在学生に参加いただき、これまでと同様に総会を行いました。今年度は鏑木眞喜子さん、石田 航さん、湯浅 紋さんの3名の博士後期課程の大学院生が博士学位を取得され、大会ではその研究成果を講演していただきました。その後の学科別講演会では心理学科の滑川瑞穂先生には「臨床と研究から考える描画法」というテーマで、教育発達学科の水戸博道先生には「音楽の多様性について考える」というテーマでそれぞれお話し頂きました。

今回はオンライン開催のため懇親会は行わず、直接顔を合わせる機会がないことに物足りなさを感じた方もいるかもしれません。しかしながらオンライン開催には卒業後は東京を離れている方でも自宅から参加出来るメリットもあります。今後もこの大会が皆さんにとって少しでも有意義な機会となることを願っています。

研究奨励事業報告

垣花　真一郎先生（教育発達学科准教授）

白金心理学会第13回大会において、2019年度の研究奨励事業に基づく研究成果報告がなされました。奨励費獲得者の報告は、下記の通りです。なお、2019年度は活動奨励費の応募はありませんでした。

《研究奨励》

- 「瞬目の影響－瞬目の多寡と模倣の観点から－」代表：吉田みなみ（心理学科3年）他10名
- 「自閉症スペクトラム傾向の対人距離における心の理論発達の関連」箭内陽乃（心理学科4年）
- 「感情への恐れと体験の回避が離人感・現実感消失症に及ぼす影響」四方陽裕（心理学専攻：博士前期課程2年）

（所属・学年はすべて採択時）

本学会初のオンライン上での開催で不安もありましたがが、報告者の方々は、パワーポイントでスライド画面を共有し、分かりやすく発表して頂きました。また、参加者の方々からも積極的な発言を頂くことができ、対面での発表会にも劣らぬ臨場感を感じました。今後のオンラインによる研究交流の可能性を感じた次第です。発表要旨は学会HPにて公開されていますので、ぜひご覧ください。

2020年度研究奨励事業には3件の応募があり、白金心理学会運営委員会で審査を行った結果、全ての応募が審査を通過しました。

《研究奨励》

- 「感謝の対象と心理的well-beingの関連の年齢差」森田一穂（心理学科4年）
- 「分かりやすいグラフ表現に関連する要素の検討」代表：陸井史織（心理学科3年）他14名
- 「高齢者の同期タッピング能力の研究」北村はるか（教育発達学専攻：修士課程2年）

2020年度は昨年度に引き続き活動奨励費の応募はありませんでした。活動奨励費は心理学部に所属する全ての学部生と大学院生が応募することができます。学会HPにて要項・申請書類などをご確認の上、ぜひご応募ください。

博士課程学位取得者講演

日本の心理臨床家に向けた多文化間カウンセリングコンピテンス教育の検討

湯浅　紋

私たちは性別、年齢、人種などの文化を持っている。個々の文化は複雑に入り組みながら、個人のバックグラウンドを形成している。人と人の間には文化差が必ず生じるが、時としてその文化差は軋轢や差別の原因となり得る。男女差別や特定の人種・民族に対する偏見などは、私たちが文化差に恐れを抱き、自己の文化を守るために他文化を攻撃してしまった結果であると考えられる。

文化差を適切に取り扱う能力のことを多文化コンピテンスと呼び、多様化する社会の中で私たちが身に着けるべき能力の一つであると認められている。心理臨床領域においても、カウンセラーとクライエントの文化には多くの差があり、その差を適切に扱う能力を指して多文化カウンセリングコンピテンス（MCC）と呼んでいる。近年において、MCCは心理臨床の専門家に必須の職能として周知されつつある。

しかし、MCC領域の研究が盛んな欧米と比較し、本邦における当該研究は少ない。そこで本研究はMCC教育プログラムの作成、その効果を検証する指標の邦訳、そしてプログラムの効果検証を目的とした。その社会貢献的意義は、心理臨床家のMCC獲得の一助となり、多様化する社会の中で十分に機能する専門家育成の一助となることであった。

結果として、教育プログラムの有効性が示され、本研究はプログラムの構成や内容が、心理臨床家のMCC教育の一つの形として示唆され、今後の研究の指針として学術的な一助を与えたと考察した。また、本邦における心理臨床領域の支援の対象として、多文化的な背景を持つ人々に焦点をあてた点、日本における心理臨床領域における多文化の定義を広義で捉え、MCCを一般的な心理臨床家の職能として指摘した点、日本の心理臨床家のMCCを測定する指標の作成を試み、専門家の能力測定の精緻化に貢献した点、心理臨床家のMCC獲得のための具体的な教育方法を提案した点を、本研究の独自性と考察した。

SC活動一覧

4月	･フレッシャーズ研修 ※新型コロナウイルス蔓延に伴い中止
5月	･心理学科：オンライン交流会、メール相談会
6月	･春スポーツ交流会 ※新型コロナウイルス蔓延に伴い中止
7月	･教育発達学科：第1回オンライン交流会
11月	･教育発達学科：第2回オンライン交流会 ･教育発達学科：個別相談会 ･白金心理学会第13回大会　運営補佐
12月	･心理学科：秋学期オンライン交流会 教育発達学科：･秋スポーツ交流会 ※新型コロナウイルス蔓延に伴い中止
1月	･大学院：「院生とZoom」オンライン交流会

乳児期の早産低出生体重児を持つ養育者の育児ストレスとそのサポート
―養育者が認識する児の気質的特徴からの検討―

鏑木　眞喜子

私は、国立国際医療研究センターの小児科に臨床心理士として勤務しており、在胎37週未満かつ2500g未満で出生した早産低出生体重児が入院するNICU（新生児集中治療室）の部署で心理臨床活動を行ってる。NICUを退院した早産低出生体重児の発達評価を小児科のフォローアップ外来で行う中で、“我が子が気難しくて、離乳食を受け付けない。”、“一度泣きだすと、どんなにあやしても中々泣き止まない。”といった養育者の声を耳にすることが多く、そこから早産低出生体重児の気質的特徴の「気難しさ」と育児ストレスとの関連を検討する、という本研究の着想に至った。未熟性による発達の遅れがみられる早産低出生体重児は、1歳未満の虐待率が正常出生体重児よりも高いことが報告されているが、我が国では、早産低出生体重児の気質的特徴の「気難しさ」に関する研究の蓄積が乏しいことも問題点として挙げられた。

第一に、我が国において乳児を持つ養育者が認識する児の気質的特徴の「気難しさ」を簡易に測定できる尺度が見当たらなかったため、この測定尺度を作成して正常出生体重児と早産低出生体重児を持つ養育者に実施した。その結果、早産低出生体重児を持つ養育者の方が、正常出生体重児を持つ養育者よりも、我が子をより「気難しく」、「育てにくい」と認識していることが明らかにされた。

第二に、早産低出生体重児を持つ養育者の育児ストレスとの関連要因を検討したところ、養育者の「社会的孤立」による育児ストレスの高さと、我が子の「気難しさ」、「児の言語発達の遅れ」および親-子の相互作用における養育者の「我が子への感受性や応答性の質の低さ」に関連がみられた。特に初産婦は、経産婦よりも、我が子に対して「予測不可能性の高さ」という「気難しさ」を強く認識していることも示された。

第三に、早産低出生体重児を持つ養育者の育児ストレスとサポートについての検討を行い、子育てサポートに満足していない養育者は、満足している養育者よりも、我が子をより「気難しい」と認識していることが示された。最後に、養育者が求める具体的なサポートについても検討し、「同じNICU入院を経験した母親同士のつながり」や、「継続的かつ詳細な発達に関する情報的サポート」を求めていることが明らかにされた。

本研究の結果から、出生時の体重という未熟性に起因する児の「気難しさ」という行動的特徴に差異があることが示された上で、養育者の子育てサポートの満足や「社会的孤立」という「主観的要素」も、我が子の「気難しさ」の認識に関連することが示された。これより、養育者が求める子育てサポートの提供や「社会的孤立」への配慮の重要性が示され、今後の早産低出生体重児の乳児虐待を予防し、子育てをサポートする方法の基礎的な資料が得られたと考える。

日本人青年の悲嘆に影響を与える要因の検討
―死別体験を青年はどのように経験しているのか―

石田　航

人間はいつかその一生を終える。それは避けようのないことであり、遺された人々は、亡くなった人を偲び、悲しみの感情と共に生活する。

大切な人を亡くすことは、悲しみの他にも、気分が落ち込むことや、亡くなった故人の幻が見えること、睡眠の障害などを生じさせる。遺された人々は、それらに対応しながら、大切な人が亡くなった世界に適応しなければならない。こういった悲しみからの適応までの期間は、フロイトによって「喪の作業」の期間と呼ばれる。

近年、死別後の強い悲しみが疾病に分類されることとなった。WHOが発行する疾病分類のICD-11（2018）では、Prolonged Grief Disorderという疾病が記載された。日常生活を脅かす程の強い悲しみは、疾病であるという考え方が認められつつある。悲しみを強める要因は、海外の先行研究によってさまざま示されてきた。そういった要因が、喪の作業を滞らせ、強い悲嘆を生じさせるとされている。

そこで、本邦ではどういった要因が悲しみを強めるのか、また、喪の作業の期間にはどのような心理的なプロセスがあるのかを明らかにすることが本研究の目的であった。

結果、死因が突然であったことと、生前の故人との葛藤が強いこと、死別後のサポートが少ないこと、統制の所在が自身にあると考えにくいパーソナリティであること、故人に接近していく対処を行うことなどが、悲しみに影響することが示唆された。また、生前の故人との関係性から、死別をし、現在までについてインタビュー調査を実施し、その心理的なプロセスを示した。これらから、現状生じている悲しみへの支援や、日常生活を脅かすほどの悲しみに至る前の対応策を考察した。

日本は超高齢社会となり、これからは現在より亡くなる人が増える社会となる。その分、悲しむ人は増え、その中には強い悲しみを呈する人も生じるだろう。本研究が臨床実践や今後の研究に、少しでも影響し、困難を抱えるどなたかの役に立つことができれば幸いである。

学科別講演会

心理学科

滑川　瑞穂先生（心理学科専任講師）

滑川　瑞穂先生

「臨床と研究から考える描画法」

本講演では私が関心を持っております投映描画法について、臨床実践の事例や研究の観点からお話させていただきました。初めてのオンライン開催となりましたが、多くの学生の皆さんや先生方にご参加いただき、大変ありがたく感じております。ご自宅や職場などさまざまな場所からアクセスでき、オンラインならではのメリットも体験できた1日でした。

芸術を媒介とした心理療法である芸術療法には、音楽やダンス、文芸などさまざまな種類があります。描画法はこうした芸術療法のなかのひとつに位置し、課題画や自由画などの絵を描くことによってパーソナリティの傾向や現在の心理状態等を把握する方法です。絵を描くと聞くと少し身構える方もいますが、大抵のクライエントさんはそれほど緊張せずに遊び心を持って取り組んでくださいます。また、比較的短時間で実施することができるので、心理臨床の現場で重宝されています。描画の解釈には長年の訓練が必要ですが、作品自体にクライエントさんの心情が表現されているので、説明などがなくともその方の様子がそれとなく伝わってくることもあります。

クライエントさんとお会いできる臨床実践の場はとても興味深く惹きつけられるものですが、描画法の発展には研究活動も欠かせません。事例的研究と量的研究との双方が求められますが、1枚1枚の絵を丁寧に眺めながら、その表現をことばや数値によってまとめる作業はとても地道で、工夫とアイデアが必要です。しかし、描画法には、クライエントさんとの関わりのなかで、ほどよい余白を残しながらも思いがけない深い一面を発見できるという魅力があります。これからも臨床と研究の場で広く用いられることを願って、私自身も日々学びを深めたいと感じています。

教育発達学科

水戸　博道先生（教育発達学科教授）

水戸　博道先生

本講演では、異なる様式の音楽をさまざまな側面から比較することによって、音楽の多様性を説明した。まず、様々な様式の音楽は、音高、和声、リズムといった音楽構造が異なるだけでなく、音楽を行う場所、音楽の役割、音楽の学び方、音楽の技能など、さまざまな側面が多様であることを説明した。そして、これらの中から、特に音楽の技能に焦点をあて、音楽の様式が異なることによって、それぞれの音楽家が身につけている音楽的技能やその獲得方法が異なることを、自身の音楽的訓練の体験から述べた。

講演では、西洋クラシック音楽とポピュラー音楽を例にとって、音楽的技能の違いを比較した。まず、西洋音楽では、楽譜が主体となって音楽活動が行われることが多く、音楽のリレラシーの獲得が優先される。これに対して、ポピュラー音楽や民族音楽では、音楽は口承によって伝えられることが多く、楽譜を主体とした音楽のリテラシーの能力は必要とされないことが多い。このような違いから、音楽の記憶などの技能が西洋音楽の熟達者とポピュラー音楽の熟達者では異なることが実証的にも明らかにされている。西洋音楽の音楽家は、リサイタルなどで膨大な情報量の音楽を記憶することができるが、その覚え方は楽譜に依存している。一方、口承法を中心とした音楽活動をおこなっているポピュラー音楽家は、耳から楽曲を覚える「耳コピー」に長けており、この能力に関しては、西洋音楽の音楽家を上回っていることも多い。

こうした音楽様式の違いによる音楽的技能の違いは、音楽教育に対しても示唆を与えている。現在では、学校の音楽教育において、さまざまな様式の音楽を学ぶことが多いが、それらの音楽の学習においては、音楽様式にそった技能の多様性を考慮しなくてはならない。

心理学部の思い出

花田　安弘先生

花田　安弘先生

年月の経つのは早いもので、この３月で定年退職を迎えることになりました。これまで何とか無事に勤められたのも諸先輩、同輩、後輩の皆さまのお陰と深く感謝しております。これまで一般教育部、文学部心理学科、心理学部で３１年間明学にお世話になり、その間、学生部長、学部長などの役職も大変でしたが、ゼミ生の皆さんとの楽しい思い出も多くありました。心理学科は心理学部を作り、教育発達学科と２学科の体制となり順調に発展してきています。今後は学生数も更に減少し大学にとって非常に厳しい時代になりますが、心理学部と白金心理学会が今後もますます発展されることを願っております。また卒業生や学部の学生の皆さんの健康と発展をお祈りしております。

清水　良三先生

清水　良三先生

明治学院に、文学部心理学科教員として赴任したのは2003年4月。1年後心理学部発足、大学院臨床心理士養成コース開設、そして教育発達学科設置のため学科を異動、5年後、心理学科に戻り、近年では公認心理師養成も始まりました。その間、心理学科一期生など早期のOBの応援を得て白金心理学会も発足しました。心理学科SCは、当初は新入学生宿泊研修のための、単発の集まりでした。それを野末教授と一緒に、4年間を通じて活動する学生の自助・自援組織として再編し、それが今の白金心理学会学生部会の基盤になっていることは私のひそかな喜びです。心理学部教員として18年、心理学科、教育発達学科、臨床コースの優秀なゼミ生に恵まれ、卒業後も勉強会を続けてこれたのがわたしの財産です。チャペル、記念館のあるキャンパスで、心理学部、白金心理学会の発展に立ち会わせていただいたことに、深く感謝いたします。

安川　恵先生

安川　恵先生

教育発達学科助手として在職した4年間、主に小学校の教育実習やオープンキャンパスなどの広報活動、そして、この白金心理学会の運営委員を務めさせていただきました。これまでの運営委員会や当日の学会を通じて、心理学部の卒業生の方々が、各方面でご活躍される様子と、卒業生の方と先生方、学部生のネットワークの確かな広がりを感じてきました。2020年度は感染症のためにオンラインでの開催になりましたが、ピンチはチャンス。これまで遠方で参加が叶わなかった方との交流を広げる機会となったと思います。

これまで、多くの皆様に温かいお交わりをいただきありがとうございました。今後の白金心理学会のご発展をお祈りしております。

小林　麻衣子先生

小林　麻衣子先生

「縁があったらまた会いましょう！」明治学院大学とのご縁は、2017年度に心理学概論A/Bを1年間担当させて頂いたことから始まりました。素直で明るい真面目な学生が多く、授業が終わってしまうのが寂しい気持ちでした。最後の授業で皆に言ったのが冒頭のセリフです。しかし、人生は奇なり。2018年度から心理学科の助手に着任し、2年生となった17PS生に再会することができました。今回一緒に「卒業」できること、うれしく思います。白金心理学会では、2019年第12回大会学科別講演会で、犯罪被害者遺族の実態についてお話させて頂きました。コロナ過で先の見えにくい昨今ですが、元気に生きていこうと思います。皆様、大変お世話になりました。お元気で！

学生部会SC活動報告

＜心理学科SC＞

学生部会心理学科では、在学生の支援を目的として活動しています。5月には、1年生を対象にオンライン交流会を開催しました。zoomの機能を使い、学校生活について紹介と、レクリエーションを行いました。また同時期には、メール相談の活動も行い、学校生活から、大学生のバイト事情まで幅広い質問に回答することができました。どちらの活動とも、参加者からは学生生活の不安が解消されたと嬉しいご感想をいただきました。

今後とも私たち学生部会心理学科では、在学生の充実した学生生活への支援を行なっていきます。引き続き、ご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

＜教育発達学科SC＞

学生部会教育発達学科SCでは、新入生の支援を目的とした活動を行なっています。教育発達学科では、新入生歓迎行事としてフレッシャーズ研修やスポーツ交流会を毎年、企画運営しています。しかし、今年度は、新型コロナウイルス蔓延に伴い、行事の中止を余儀なくされてしまいました。また、そんな社会的状況に加えて、オンライン授業が導入され、大学生活が満足に送れていないことで、新入生の多くは不安を抱えていたと思います。そのような不安を解消するために、私たちは、オンラインでの相談会や交流会を企画しました。

第1回オンライン交流会には多くの新入生が参加し、大学で友達ができ、楽しい時間が過ごせたという声を聴くことができました。

また、第2回オンライン交流会後に個別相談会を実施し、履修に関する疑問などに大学生活の先輩として相談に乗りました。結果として、開催前後で表情が柔らかくなり、不安が解消されたことを感じることができました。

このように、今後も私たち教育発達学科SCは新入生・在学生が充実した大学生活を送れるように支援していきたいと思っております。学科の代表として精進してまいりますので、これからもよろしくお願い致します。

＜大学院SC＞

大学院SCは2020年1月20日(水)昼休みに「院生とZoom」を開催しました。心理学研究科への進学を検討している、心理学部2～4年生の疑問や悩みに大学院生が答えるイベントです。例年、「院生とご飯」として共に昼食をとるものですが、今年度はオンラインでの交流会となりました。学部生からの質問には「大学院生の生活について」「勉強方法」等がありました。限られた時間・空間でしたが、参加した学部生の積極的な発言と、協力頂いた院生の丁寧な助言により、有意義な時間となりました。今年度もご支援ありがとうございました。

事務局よりお知らせ

○白金心理学会第14回大会のご案内

2021年度の「白金心理学会第14回大会」については、秋学期開催を予定しております。総会から始まり、2020年度研究・活動奨励費獲得者による研究成果報告が行われ、その後学科別講演会を予定しています。残念ながら、懇親会の予定はありません。状況により、オンラインでの開催の可能性もあります。 今後の情報はHPにて更新いたします。

○教員の動向

2020年度に退職された先生

心理学科：花田安弘先生、清水良三先生

教育発達学科：杉山雅俊先生、玉腰和典先生

助手：小林麻衣子先生、中島隆太郎先生、鑓水秀和先生、江草遼平先生、安川恵先生

2021年度サバティカルの先生

心理学科：金沢吉展先生

教育発達学科：佐藤公先生、松永あけみ先生、宮﨑眞先生

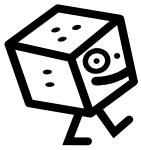
以上の先生は2021年度は出校されませんので、ご注意ください。

○白金心理学会ホームページ

白金心理学会事務局からのお知らせ、白金心理学会が主催するイベントのお知らせ（在学生、卒業生向け）、広報紙「さいころ」のバックナンバーなどを掲載しています。また、連絡先の変更や大会の申込みなどもホームページから行うことができます。スマートフォンからも閲覧できますので、是非一度ご覧ください。

○卒業後連絡の取りやすいメールアドレスのご登録をお願いします！

白金心理学会ＨＰより変更可能です。大会や学会情報がニュースレターでお知らせできるよう、ただいま準備しておりますので、ぜひご協力をお願いします。



白金心理学会
イメージキャラクター
「さいころくん」

発行：
明治学院大学心理学部
白金心理学会 事務局

〒108-0074
東京都港区白金台1-2-37
明治学院大学
心理学部共同研究室内

TEL＆FAX:
03-5421-5814
問い合わせ用E-mail：
shinro@psy.meijigakuin.ac.jp
白金心理学会ホームページ
URL:https://
psy.meijigakuin.ac.jp/shiropsy/